



日本記者クラブ

著者と語る 『おらおらでひとりいぐも』

若竹千佐子・芥川賞作家

2018年3月9日

デビュー作でいきなり芥川賞を受賞。60代で作家になるまでの道のりを辿る。小さいころの夢が本を書く人だったのに、もっと早く実現できなかったのは何故と自問自答。「20代のころは自分の小説のテーマを何もつかめていなかった」と述懐する。

「自分のことを分かりたい。分かったことはおもしろく語りたい」。この気持ちをずっと持ち続けてきた。

そこに、突然の夫の死。「こんなつらいことが自分の身に起きた。私はどうしてもそこに意味を見出したい人間なので、このままでは終われない」。四十九日の翌日から小説講座に通い始めた。それが、70代の未亡人「桃子」さんの内面を描く物語に結実した。

司会：小川記代子 日本記者クラブ企画委員（産経新聞東京本社編集局副編集長）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル動画](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会＝小川記代子クラブ企画委員(産経新聞)

皆さん、こんにちは。

きょうは、『おらおらでひとりいぐも』で芥川賞を受賞されました若竹千佐子さんにおいでいただきました。

私は日本記者クラブの企画委員で産経新聞社の小川記代子と申します。どうぞよろしくお願いたします。

皆さん、こちらの本はお目通しだと思えますし、大変話題になりました。その独特の文体、そして女性に年齢を言うのはですが……。60代でのご受賞ということでも大変注目を集めました。単行本でいま現在、50万部を超える部数を記録しています。文芸書としては異例の売上だというふうに認識しています。

作品は、70歳を超えている桃子さんの人生の晩年に訪れた胸中を語る。読み方はいろいろあると思えますけれども、晩年を受け入れていくというさまが独特に描かれている大変おもしろい作品だと思います。

若竹さんは岩手県の遠野のお生まれで、臨時教員をなさった後、上京されました。結婚後は主婦として、働いてこられました。この作品では、郷里の東北弁——東北弁と一概に言ってしまうといいかどうかわかりませんが、その東北弁がとても効果的に使われております。

きょうは、若竹さんにたっぷりお話をいただくとともに、その後、皆さんからのご質問も受けたいと思えますので、どうぞよろしくお願いたします。

それでは、もう皆さんお待ちかねなので、早速若竹さんにお話をと思えます。効果的に使われた東北弁を実際にお聞きになりたいと思えます。ご本の中の一節をお読みいただくかと思っておりますので、まずよろしくお願いたします。

若竹千佐子・芥川賞作家 皆さん、どうもこんにちは。こんな豪華なお席に呼ばれるなんて、ほんとに光栄です。

では、早速、東北弁、耳慣れない方もいっぱいいらっしゃると思えますので、ちょっと恥ず

かしいんですけれども、まず、2つばかり朗読させていただきます。

最初は、冒頭の文章です。

「あいやあ、おらの頭（あだま）このごろ、なんぼがおがしくなってきたんでねべが

どうすっぺえ、この先ひとりで、何如（なんじょ）にすべがあ

何如（なんじょ）にもかじょにもしかたながっぺえ

てしたごどねでば、なにそれぐれ

だいじょぶだ、おめには、おらがついでっから。おめとおらは最後まで一緒だがら

あいやあ、そういうおめは誰なのよ

決まってっぺだら。おらだば、おめだ。おめだば、おらだ」

これは桃子さんという主人公の脳内の会話なんです。

東北弁とは何か

あともう一つ読むところは、桃子さんの脳内の住人を柔毛突起と言っているんですけれども、その柔毛突起の一人で、老婦人、人品穏やかな老婦人が、東北弁とは何かということを行っているところをちょっと朗読したいと思えます。

「人の心は一筋縄ではいがねのす。人の心には何層にもわたる層がある。生まれたでのあがんぼの目で見えている原基おらの層と、後から生きがために採用したあれこれのおらの層、教えてもらったどいうか、教え込まされたどいうか、こうせねばなんね、ああでねばわがねという常識だのなんだのかんだの、自分で選んだと見せかけて選ばれてしまった世知だのが付与堆積して、分厚く重なった層があるわけで、つまりは地球にあるプレートどいうものはおらの心にもあるのがすな。おらしみじみ思っても、何事も単品では存在しね。必ず類似模倣するものがあるわけで、地球とおらも壮大な相似形を為すのがす。で、おらどの心にもあるプレートの東北弁はその最古層、言ってみれば手つかずの秘境に、原初の風景としてイメージ

のように漂っているのですが。そつたに深いど手が届かないがどいうど、そでもねぐ、おらは、おらが、と一声呼びかければ、漂うイメージそわそわと凝集凝結して言葉となり、手つかずの秘境の心蘇る。ちょうど、わたしが、と呼びかければ体裁のいい、着飾った上っ面のおらが出てくるように。それどいうのも、主語は述語を規定するのですが。主語を選べばその層の述語なり、思いなりが立ち現れるのす。んだがら東北弁がある限り、ある意味恐ろしいごどだども、おらが顕わになるのだす、そでねべが。」(笑)(拍手)

ありがとうございます。

これは、イメージとしては、昔、長岡輝子さんという女優さんがいらしたと思うんですけども、その女優さんがちょっと言うてみるような感じで、東北弁とは桃子さんにとって一体何なのかということ、ちょっと表現してみようと思ったところです。

改めまして、15分くらい、自己紹介ということなので……。

司会 もっと長くて大丈夫です。

若竹 そんなに長くは……。私は、岩手県遠野市というところで、昭和29年、1954年生まれです。63歳。来月は64歳になります。

それで、平凡なんですけれども、小説家になりたいと思っていたのは、本当に小学校の3～4年のころで、先生に連れていってもらって図書室に一人で入らせてもらったときに、図書室のかび臭い、湿っぽい、あの本のおいがとってもいいなと思って、それで、本を書く人に私はなるんだみたいなのが、結構ほんとに早くからありました。

でも、そう思っていたんですが、もちろん作家なんていう職業があることも知らなかったです。でも、私の本も図書室の本棚に1冊乗れるような人になりたいというのが私の子どものころの夢でした。

ただ、それで生活できるなんてもちろん思っていないませんでした。地元の岩手大学の教育学部に入って、学校の先生、中学校の国語の先生になりたくて、それで教育学部に入ったんです。

臨採教員をしながら、5年、教員採用試験は受け続けたんですが、なかなか採用されませんで、そのあたりが自分としては一番の挫折の期間だったです。

それで、そのころにちょうどお見合いの話がありまして、これは「飛んで火に入る夏の虫」と、旦那さんはそういうかわいそうな、いい人だったと思って、それで結婚して、家庭に入ることになりました。

やっぱり心の中では悔しいという思いがあったし、このままでは終われないみたいなどころもあったような気がします。でも、そう言ったって歯噛みをして生きてきたわけではなくて、子どもも2人いましたし、いい亭主でしたので、家庭人としては幸せだったです。けれども、やっぱり心のどこかでは寂しいな、これだけじゃつまらないな、みたいな気持ちも心のどこかであったことは事実です。

小さいころの夢が小説家ということでありました。けれども、その当時のことを思えば、63にならないまでに、どうして早く小説家になれなかったのかな、どうしてだったんだろうなと思うと、私の20代のころは、まだ私、自分の小説のテーマというのが何もつかめていなかったんです。若くしてきらめく才能で世に出てくる作家さんとは、私、やっぱり違ったんです。どこがどう違ったかというのは、私も知りたいところだし、このところ考え続けてきたことなんですけれども、そういう才能はなかったです。

わがったことをおもしろく語りたい

では、どうしていまごろになってこうなのかということも考えてみますと、私、ずうっと自分の心の中を探索するのがほんとに好きなんです。自分とはどういう人間なんだろうみたいな、人間て何だろうとか、そういうことをずうっと考え続けて、わかったことを書きつけない人間でした。なので、私の本当の心の奥底に、さっきのおばあさんの言葉じゃないけれども、いろいろこうせねばなんない、ああでねばわがないという、いろいろ人から、親だの先生だの、

周りから、こういうふうになんか教わったものではなくて、私の本当の「原基おらの層」と言っているんですけども、生まれたての赤ん坊の私の中にあつた心というのはわかりたい、自分のことをわかりたいという気持ちと、わかつたことはおもしろおかしく語りたいたいとか、東北のほうだと「語る」と言うんですけども、「話す」よりもっと古い言葉で、語りたいたい、そういうものがほんとに私の心の中を探ってみると、わがりたい、わがったことをおもしろく語りたいたいという2つの気持ちはあつたんだなということは、随分と自分の心を探っているうちにありまして、そのために、ずうっと考え続けてきたことです。

それで、私は、例えば家庭でこんなに、まあ、恵まれたといたって、そんなにお金持ちなわけじゃないけれども、心優しい夫と、かわいい子どもがいる、そういう状況の中でも、何で私はこんなに寂しいんだろうみたいなところが、なぜ、なぜなんだろうみたいなのが私の考えの原点です。それを探するために、自分の心を探すためだけじゃない、まだみつからないから、いろんな人の本を読んでみよう、心理学の本を読んでみようとか、いろんなことを読んでみようと思つた中でみつけた本が、河合隼雄さんの一連の本だったし、その後、上野千鶴子さんの本でした。

このお二人の本を読んでみて、いちいちほんとにうなづくように、私の人生を通して、このお二人の言っていることは正しい、ほんとに私はこの人たちの言っていることがいちいちよくわかるみたいな感覚がありました。この人たちの哲学は即私のものとして受け入れていいんだみたいなことで、これで私は自分の人生、人間とは何かとか、生きるということはどういうことなのかということを考え続けてきた核になつた本たちでした。

それで、わかつたことはおもしろく語りたいたいというのがもう一つの私の欲望でして、それで、桃子さんという一人の人間をつくり出して、桃子さんに、老年の桃子さんですから、人というのは、やっぱり自分の人生を納得したいと思うものだと思つていて、私は、そういうもので、

桃子さんがどういうふうになんか自分のことを考えて、どういうふうになんか受容していくのか、桃子さんの脳内の対話を、だから、出来事なんていうのはほんとになんかちょっとりなので、大した変化はないんですけども、一章なんかでは、桃子さんがお茶をすすって、湯飲み茶碗をこうやってひねくり回して、それで立ち上がって、階段を上がって、2階の踊り場に行つて、外を眺めるくらいの、ほんとになんか出来事としてはほんのちょっとりなんだけれども、桃子さんの中の脳内のあれやこれや、有象無象の話し合ひで展開していくような、そういう小説を通して、一人の女の人が生きてきて、何を考えているかということ表現したいなと思つた。それでこの小説ができました。

私の自己紹介なんていうのは、これくらいのものですが、よろしいでしょうか。(笑)

司会 十分わかりました。ありがとうございます。

ついこの前、遠野に里帰りといつていいんでしょうか、なさつて、大歓迎を受けられたように、弊紙の記事でもみまして、どんな感じでしたか、帰られて。

東北弁への誇り

若竹 いやあ、本当にびっくりしました。何でこの人たちはこんなに喜んでくれるんだろうという、ほんとに、もちろん遠野だから、親戚縁者はもちろんいっぱいいるんですけども。遠野でも、全く顔も知らない人たちがほんとに喜んでくれて、おじいさん、おばあさん、手を振ってくれて、なんか、私、アイドルじゃない(笑)、そういう感じにちょっと勘違いするくらい、ほんとに喜んでくれて。しばらく考えて、なして、この人たちはこんなに喜んでくれたんだろうって、こつちの木更津のほうに帰つてから、しばらく考えたんです。

それで、東北弁で書いた、ということだつたんだなと思つた。もちろん、私は小説家になりたかつたから、言葉にはこだわりがあるつもりです。でも、普通といつたら終わりだけでも、普通の農家のおじいさん、おばあさん、

あの人たちがあそこまで喜んでくれたのは、やっぱりあのおじいさん、おばあさんたちにも、言葉というものにすごく誇りがあったんだなということに改めて感じました。

東北弁というと、皆さんはどう思っているか知らないけれども、何か暗い、あまり喜怒哀楽のはっきりしない、汚い言葉みたいな、意外とネガティブな印象を持たれているかもしれない。私たちも子どものころは、東京さ出でて稼ぐときに、この言葉だど恥かくんだから、言葉を直さねばだめだよ、みたいな、そういうことを学校の先生にも言われたりもしました。だから、自分たちの言葉に誇りを、ちょっと持ちたいんだけど、持てないみたいな気持ちがどこかに心の中に働いていて、だけれども、それをこの『おらおらで』で東北弁で書いてくれたことを、よく書いてくれたという思いがおじいさん、おばあさん——おじいさん、おばあさんと言いますけれども、私もいいかげん——まるで自分が若いような言い方をしますが、私もこの年になって、そういう言葉というか、年配の人たちもほんとに喜んでくれたのは、東北弁を使っているということ、東北弁で自分たちの思いというか、言葉を表現してくれたということの喜びだったんだな、やっぱり言葉って、ものすごくその人自身のアイデンティティーだなと思ったんです。

ほんとに東北弁のおもしろさ、東北弁は、決して暗いものではなくて、もっとユーモラスなもので、どの方言もとっても豊かだと思うんですね。私の父親がよく言っていた言葉が、「人間というのはガンバコに半分足を入れねばわがらねよ」と。「死ぬ」とか、「死にそうな」ということを「ガンバコに足を突っ込む」というふうな表現をしている。方言で、すごく具体的な言葉だと思いますね。ガンバコに足を突っ込むイコール死にそうになるということですから、そういうふうに、方言というのは生活が積み重なっているから、勢い言葉に具体性を帯びる言葉だと思うんですね。

東北弁に限らず、いろんな言葉もそうなんだと思うんですけども、標準語で育った人は、もちろんそこに生活の体験があるわけだから、

そこに豊かさが生まれるとしても、私たちのような後から仕入れた人たちにとっては、どうしても言葉に具体性をなかなか表現しづらいみたいなのがあって、話は戻るんですけども、おじいさん、おばあさん、遠野の人たちが喜んでくれたことは、方言で自分たちの言葉を使って作品を書いてくれたことの喜びみたいなものが伝わってきて、ああ、私、ちょっといいことしたんだな、みたいな、そういう思いでいました。

ごめんなさい。長い……。

司会 遠野といえば、『遠野物語』が知られていて、囲炉裏端でおばあさんが、最後、どんと晴れで、という語りが有名じゃないですか。

先ほど、ご自身のことをわかってもらいたい、そしてわかったことをおもしろおかしく伝えたい、表現したいという思いって、強引ですけども、語り部さんのようなイメージなんですか。

自分の人生を納得したい

若竹 ああ、そうですね。そういうことはあるかもしれませんが、うん。私、『遠野物語』というと、大人になってから『遠野物語』を読んだので、昔話も聞くことなく、私としての『遠野物語』というのは、私の祖母が裁縫をしている人だったので、よくそこにおじいさん、おばあさんが集まって、それこそきせるでパンとやって、プツッとやってたばこを吸うような、あの時代の、私の祖母は明治30年生まれでしたから、そういうふうなあの年代の人たちが世間話をしていて、あそこのうちはどっから嫁をもらった、その嫁の来たうちはこれこれこうで、という話を延々とおじいさん、おばあさんというのはしているんです。

何でこのおじいさん、おばあさん、こんなに人の家庭のことをここまで話をするのかなあと、子どものころはわからなかったんですが、ある程度私も年配になってくるとわかってきたことが一つあって、自分の人生を納得したいから、ああいうふうに話しているんだな、うーん、なるほどと。よくおじいさん、おばあさん

たちが、あそこのうちはこうなって、ああなって、例えば「かまけしたぞ」なんて、「かまけした」ということはおそらくわからないと思うんですが、方言で、「かまどを返す」という意味で、破産するとか、そういう意味なんです。あそこのうちはこうなって、ああなって、かまどを返してしまった、うーん、とか言って、また次の話におじいさんたちの話は移っていくんだけど、あの話は、きっとそういった好奇心だけではなくて、もちろんそれも世間話の中にあっただろうけれども、でも、そういうことで世の中というものとか、自分とか、周りの人の来し方を考えつつ、生きるということは何なのかということをおぼろしく納得したかったんだな、だからあんなことを話していたんだなみたいな。

そういう思いがあって、やっぱり私もそういうことの長い流れの中の一人で、私もあのおじいさんたちと同じ、あの人たちは、まだそれでも、もちろん字は書けたかもしれないけれども、記録として残すようなことはなかったはずで

す。だから、私はまだ親に、役に立たないと言われてしまったんだけど、大学へ入れてもらって、考えることのおもしろさみたいなものを気づかせてもらって、だから、私は書かなくちゃいけないんだみたいな思いがあって、この小説を書いていました。

ごめんなさん。語り部です。

司会 すごくよく……。

『遠野物語』も、昔は口承で、口伝えでしたからね。たまたま書き込めたのがあの本でございますものね。

若竹 はい。

司会 ちょっとその後の生活になりますけれども、先ほどもお話にもありましたけれども、上京なさって、結婚して、とてもいい旦那さんで、いいお子さんも生まれて、それでもやっぱり、どこかのインタビューですが、ご自身が必要とされていないというふう感じて、ずうっと悶々とじゃないですけども、という思いがずうっとありましたと。先ほどちょっとお話し

になられましたけれども、そのあたり、どういう思いだったのかというのが、もう少し詳しく教えていただければ。

若竹 もちろん家庭では、私、必要とされる人間だったわけですけども、やはり女の人でも社会性が必要なんだというのは、私の実体験で、社会という世界を閉じられて、狭い世界で、家庭の安寧というか、家庭を幸せにするということを第一義に考えて生きてきたんだけど、それだけじゃ、女の人だって、やっぱり外に出たいんですね。

安倍内閣が、「女性の活躍する社会」とかなんとか上から言っているんだけど、そうではなくて、女の人が、女の人で、やっぱり生き生きと暮らすためには、家庭の幸せもあるかもしれないし、やっぱり外に出て働きたい、男並みとは言わない、いまの女の人たちが生き生き働けるような世の中というのはやっぱり必要なんだというのは、私自身の心を探索してみても、全くそれは本当の話だなというのは実感です。

小説の世界に入るきっかけ

司会 聞きづらいですけども、小説の世界に入られたのが、ご主人がお亡くなりになられたというのが一番大きなきっかけということでしたけれども、そのときの思いとかを教えてください。ご自身が、それによってどのような変化が、どういうふうに分が変わったのかということについて、お願いできますか。

若竹 ことしの7月でもう丸9年になりますので、ほんとに夫を失ったときの絶望感みたいなもの、絶望していた自分を客観的にみる視点も十分にでき上がっているんで、思い出すことはもうそんなにつらくはないんですが、何か私は意味を探したい人間だったので、どうしてここで夫を失った、何か意味がないんだろうか、こんなつらいことが自分の身の内に起きたときに、私はどうしてもそこに意味を見出したい人間で、だから、このままでは終われない。悲しんで、うちひしがれてばかりはいられないみたいな思いがあって、今度こそ小説にほんとうに向

き合ってみようと思いました。意味を探して、みつけたものを小説にするために、という思いでした、小説講座に通い始めたのは。

司会 四十九日の翌日から小説講座に通うという……。ご経験をなさった方は、なかなか四十九日はまだ落ちつかないころでしたからね、だから、よほどあったんだなと……。

若竹 そうですね、意味を求めたかったし、四十九日といっても2カ月ぐらいですから、ほんとに意味を探したい。どうしてだろう、どうしてだろう、何か意味があるはずだ、みたい。そういうところは、とにかくわかりたいみたいのが、ほんとに私の心の基調になる気持ちで、みんなもそうだろうと思っていたら、案外そうでもなかったりな、と。なら、それは私の特徴として考えていいんだろうなんて思って、それで小説講座に飛び込みました。

司会 その小説講座では、今月号の文藝春秋にも載っていますけれども、皆さんが書いてこれられた作品をみんなで評価し合うという方式だということです。どこかで読んだんですが、とても印象的だったのは、厳しい批評もあるんですよ、もちろん。「それ、全然、気にならないのよね」と、ご自身も結構ズバズバ他人の作品をおっしゃるようで、ちょっと意外だったんですけれども、その辺は、どういう気持ちで受け入れていたんですか。

若竹 批評というと、もちろんよくするために言う言葉なので、悪口とは全然とらないわけだから、そのときはガツンときても、言っていること、あ、これは正しいと思えば、次はもっといいものを持っていくというような、だから、ほんとに自分の小説を小説講座にかけるときは、ほんとに楽しくらいで、何て言われるかなみたいなのがとても……。会があるとき、自分で悲しいんだけど、あ、これは私がほんとに心の底から求めていたものがここにあるみたいな、ひとりで生きるときは、自分を鼓舞するものはここにあるんだ、みたいな気持ちがありました。

司会 厳しい批評をもらおうと来なくなってしまような男性もいたんですよ、と書いて

ありました。

若竹 男性も女性も、やっぱりその人その人ですよ。でも、私は、なんかおもしろいな、私、すごい根が楽天的な人間で、本当に子どものころの「ひよっこりひょうたん島」のドンガバチョというのが私の中ではものすごい……。10歳ぐらいの全く無垢なときに、ああいうキャラクターがあると、もうそれに自分が同化しちゃうというか、だから、何かほんとに持って生まれた性格なのか、それともドンガバチョ先生に教わったことなのか、すごい楽天的な人間なので、もうおもしろくてしょうがないみたい。

司会 この作品の中で、桃子さんの脳内のものがいっぱい出てきますし、物事の輻輳的な見方がとても印象的なんですけれども、ご自身の中にも、いろんな人がいるんですか。

人間は複雑怪奇なもの

若竹 ああ、もちろんそうです。私の人間観というのは、一人の人間の中にいろんな矛盾する要素がいっぱいあって、例えば居丈高に人にワーツとしゃべる人が案外小心者だなんていうことがありますよね。全く相矛盾するようなものを補完し合いながら、一人の人間の中で大勢の人間の目みたいなものが共同体にいるような、そういう人間観なもので、私としては、脳内で桃子さんほど意識的に、こう言って、ああ言ったみたいなことはなくても、無意識の中でも、案外、人は対話したりしているんじゃないかな。言葉にならない言葉で。

だから、あるとき、きのうと全然変わらないのに、きょうは何かめったやたらにおもしろくないとか、ああ、沈んでしまう、きのうと全然環境は何も変化はないのに、沈んで、というのは、その脳内の中の無意識の、言葉にならないやりとりがあって、パッとしないなみたいな。

だから、人間というのはいろんな要素を持った複雑怪奇なものなんだと思っていて、一人の人間を設定するときにも、この人、正義感のある人に主人公をしようなんていうのは、案外無意味なような……。正義感があるという中に、ちょっと後ろでは悪いこともするような、そう

いう複雑な厚みのあるのが人間じゃないかなみたいな感覚はあります。

司会 私からは最後なんですけれども、今回は、50代から書き始めて、60代での受賞ということで、世の中の年配者と言われる方々が大変励まされたというか、エールを送られたような気分になっていると思うんですが、その方たちに向けて、一言何か……。

老年は実は豊かな時代

若竹 老年というのは、ほんとに豊かな時代だと思うんですね。もう子育ても終えて、とても自由に生きられる時代だと思っていて。私、60代なんですけれども、子どもころ、60代というすごい老けて、おばあさんというイメージでみていたんですけども、自分がその年になると、案外40代とあまり変わらないみたいな。だから、結構やれるんじゃない、これから、みたいな、そういう印象を持っています、あした、バタンと倒れるかもしれないけれども、いまとりあえず手足、動かし、頭だって、ひょっとしたら二十歳のころの私よりずっと経験知の分だけ頭よくなっているよと思っていて、それで、まだまだやれると思っっているんですよ。

だから、世間様が老年というイメージで、おばあさんという頭にごんにして、鼈甲のかんざしなんか挿して、これやっているようなおばあさんじゃないおばあさんを私は生きてみようと思っていて、うん、だから、あまり固定観念じゃなくて、私は私の生き方で老いを生きようと思っていて、お互いさまだなということです。以上です。

司会 ありがとうございます。

◆ 質 疑 応 答 ◆

司会 済みません、ちょっと長々と私が聞き過ぎてしまいましたが、会場からご質問を受けたいと思います。

何か質問、ございますか。

質問 受賞作は、先ほどから出ていますように東北弁が重要なファクターだと思います。

駆け出しの4年間を盛岡でおくりましたので、作品中の桃子さんの言葉はよくわかります。

東北弁と一言で言いますけれども、いろいろ種類があって、中でもあの言葉は岩手県の中部地方、いわば旧南部藩ですね。南部弁だと思うんです。とてもやわらかな響きがあって、土地で話されると、相手を非常に思いやる温かな雰囲気をつくり出す美しい言葉だと私は思っています。

そういうことが作品全体の印象になっていて、多分それが50万部にもつながっているんじゃないかと私は理解しているんです。

それで、お聞きしたいことなんです、言葉というのは、字面を、方言を活字にする場合に、字面にすると限界があると思うんです。言うまでもありませんが、言葉は立体的なものですから、音の強弱とか抑揚とか、例えば、先ほどから「おら（上昇調）」という言い方をされていますね。「おら」、「ら」が上がっていますね。

私の育った静岡の中部地方では、男の子は「おら（下降調）」と言います。「お」のほうにアクセントがあるんですね。それから、ひとりというのも、ロボットが言えば「ひとり（同調）」だろうけれども、「ひとり（上昇調）」となりますね。「いぐも」とありますけれども、「い」と表記されますが、聞くほうは、ローマ字で言うとIとEの中間ぐらいのふうに、「え」ではないけれども、そんな感じで聞こえるんですね。それがローカルな風土の中で生きてくるのが方言だと思うんですけれども、そういうニュアンスのある言葉を活字の中に落とし込むという作業の中で苦勞をされたのかどうか、あるいは、ご自分の中で、言葉を反芻されているうちに、ものを全部あそこに表現できたのか、ということをちょっとお伺いしたいと思います。

若竹 そうですね、むしろ、苦勞というよりか、楽しかったんです。言葉というのは、私、こちらのほうに来てからのほうが実は長くて、だから、方言を使うということは、即父や母や、子どもころの昭和30年代の光景につながる

もので、もう一つ一つの言葉に、あ、これは父親由来の言葉だとか、あ、これは母さんが言った言葉だとか、そういう一つ一つ思い出が染みついた言葉なわけで、それを書き込むことは、何かもう一回父とか母とかを小説の中に生かすような、生き返らせるような作業でもあって、苦勞というよりか、むしろ喜びのような気がしました。

質問 大変おもしろく拝読をいたしまして、私は実は学生時代から、『遠野物語』というのに魅せられていた人間の一人でありまして、もう読んだ最初から、桃子さんの脳内細胞には座敷童子がいるんだろうというように思い込んでおりました。

私は、今回の『おらおらで……』をずうっと拝読しながら、桃子さんの頭の中に常に座敷童子が出たり入ったり、出たり入ったりするんだろうというように思っていたんですね。

先ほどお伺いして、ある程度大きくなるまで読んでいなかったということも伺ったんですけども、やはり遠野の人たちの血肉になっているんじゃないのかな、そんな見方は違っているんだろうかというのが質問としては1点。

しかし、やはり経験知として、いっぱいあったことが今日までであるというのは、遠野の人たちを含めて、座敷童子的なものがいろんな人たちの間にもあって、例えば瀬戸内寂聴さんが遠野のお寺さんでお話されると、本当に多くの人が集まるというようなことも含めて、やはり豊かなものが育ったんじゃないのかなと思っ

若竹 ありがとうございます。そうですね、遠野は、言ってみれば何もないようなところなんですけれども、でも、ほんとに『遠野物語』というすごい語り継がれるものがあって、それは遠野の人間はみんな誇りに思っているんだと思います。

私も、そうですね、ずうっと同じく遠野に対して反抗期もありましたので、「ああ、もうこんなところ、出てやる」みたいな時代もあったし、全部が全部遠野が好きなきばっかりじゃ

なかったですが、この年になってみると、確かにふるさとというのはものすごくありがたいのだなとは思っております。

質問 第2作目をすごく期待するんですけども、どんなキャラクターを若竹さんは描かれないのか、複雑な人間の内面ですから、また大変ご苦勞なさると思うんですけども、どんな人間を描かれないのでしょうか。

若竹 そうですね、いま、第2作についていろいろ考えているところですが、あまり言うと、ほんとに、まだ言葉には……。

でも、やっぱり私の小説観としては、一人の人間がむしろ何を感じ、何を考え、どう行為したのかみたいなどころを書きたいもので、出来事よりかは、その人の脳内の移り行きみたいなものを書きたいわけで、やっぱり主人公は中年から老年に至る女性で、まだ『おらおらでひとりいぐも』では書き切れなかった私の思いもあるわけで、今回はそれについて絶対書いていこうと思っています。

質問 私は、若竹さんの小説を冒険小説みたいな感じで読んだんですけども、すごい心の中の動きというのは、活劇シーンみたいな感じがして、心の何か音とか、そういうものが聞こえるようなふうに読みました。いままで読んだことのない小説だったので、すごくそれはびっくりしました。

昔読んだ、北方謙三さんが初めてデビューしたときのような、ああいう感じとはまた違うんだけれども、ああいうショックというか、わあ、すごいなというのは僕は感じました。

質問ですけれども、今回の小説の中で、桃子さんが「周造さんのはからい」というくだりがあって、周造さんは私を生かすために死んだんだというふうに書いていますね。千佐子さんへの和美さんのはからいというのは一体何だったのかなと、それを追い求めて小説を書かれたとおっしゃっていましたが、まだそれを見つけないのかもしれませんけれども、その話をちょっとお聞かせできればと思い

ます。

喪失体験から見えてきたもの

若竹 喪失の体験ということなんですけれども、その中に、何ていうんだろう、私は夫が亡くなったということが人生上で一番の大きな出来事で、そのときに考えたことは、この小説の中でも書いているわけですが、例えばみえない世界の発見だったり、あとは、私の心の中に、本当はひとりで自由に生きたいんだという気持ちもあったんだなということも一つの発見でしたし、私の中で、夫が亡くなったということで、悲しみだけじゃなくて、はかりしれない大きなものがみつかったんです。どうしてもそのことは、和美さんが私にくれた一つの——これはちょっと恥ずかしいからあれなんだけれども、周造が亡くなったということは、桃子さんにとっては、周造の愛なんじゃないかなということに、だから、意味を探したかった桃子さんにとっては、そういうふうに見つけることで、周造の死をむしろ心の中で生かしたいと思っていると思います。ということです。

司会 ありがとうございます。

では、これで質問はよろしいでしょうか。

質問、そしてご丁寧な回答、ありがとうございました。

以上をもちまして、若竹さんのお話を終えたいと思います。

いつもの恒例なんですけれども、先ほど控室のほうで若竹さんのほうからサイン帳にサインをしていただきました。きれいな字なのでみえると思いますが、みえますか？

「おらおらでひとりいぐも みんなでいぐも」(拍手)

私、書名を書いたんだと思ったんですけれども、「みんなでいぐも」がくっついてたんですね。その「みんなでいぐも」の、その心を教えていただけますか。

若竹 個人の尊厳というか、個人の自由、絶対妨げてはならないものだという考え方で、最後まで自分で、おらはおらの考えを通して生き

ていくんだというのが桃子さんであり私の考えなわけですけども、もう一つは、それだけではやっぱりだめで、私は学生時代から思っていることなんですけれども、例えば自分たちの自由を妨げるようなことがあれば、例えばこのごろ、戦争とか、そういう何か嫌な時代に逆行するような世の中の動きがあるような気がします。例えば「教育勅語」(の復活)なんていうのは。あんなすごい犠牲を払ってやっと手に入れたものをまた明治の時代に逆戻りさせるような世の中というのは、私は、許してはいけないことだと思って、そういうのはみんなの力を結集して反対していくべきものだ、だから、ひとり桃子さんの孤塁を守って、自分だけの幸せを追求してはいけないと思っていて、だから、「ひとりでいぐも」と同時に、やっぱり「みんなでいぐも」という姿勢も大事なんだろうなと思って、こういうふうになりました。

司会 それでは、これで終了いたします。ありがとうございました。

文責・編集部